

(823)

超塑性材料のm値の決定方法に対する考察

鳥取大学工学部○岡 宗雄 大学院 笠谷 泰司

1. 緒言

歪速度感受性指数、m値を決定する方法は、いくつか提案されて実行に移されて来ている。しかしこれらの方法について系統的な検討を加えた報告は少なく、且つ各方法で得られたm値の信頼性についての考察も少ない。本研究は高炭素鋼を用いて、m値の決定法の代表的な6種類の方法によてm値を求め、各方法の得失を明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

加工熱処理により粒径を約1μm程度にしたSK3材(1.0% C)の板状試験片(G.S. 5×50×1mm)を用いて、歪速度変化試験および応力緩和試験を行った(Table I)。歪速度変化法から得た荷重-時間曲線(Fig. 1)からの解析法として、次の方法がある。

M1はV₂での最大荷重点AとA点に相当する歪量をV₁で外挿したB点での荷重とクロスヘッド速度を用いる。M2はV₁、V₂での最大荷重点C、Aの真応力と真歪速度を用いる。M3はV₁からV₂への速度変化を行った点DとV₂において速度変化がなされた歪までの逆外挿による点Eの真応力と真歪速度を用いる。M4はV₁からV₂へ速度変化させた時にすばやく荷重が増加するところの点Fと速度変化した点Dの荷重とクロスヘッド速度を用いる。M5はクロスヘッド速度をV₁からV₂くらいまで種々組み合わせてm値を算出する。応力緩和法(REL)では、得られた荷重-時間曲線より σ_0/σ および $\frac{d(\sigma_0/\sigma)}{dt}$ を求めてその値を両対数プロットした時の直線の傾きよりm値を得る。

3. 結 果

各方法によて得られた93Kでのm値はTable IIに示されている。

i) m₁とm₂は比較的近い値を示したが、m₂は少し高い値を示した。

ii) m₄とm₅は前項のm値の $\frac{1}{2}$ かそれ以下の低いm値を示した。この結果はAl-Cu共晶合金におけるHedworthら(1971)の報告と一致した。

iii) m₅はm₁, m₂, m₃に比べて低い値を示したが、その理由として、速度変化比が2.5より高く、歪速度の急激な変化によると考えられる。

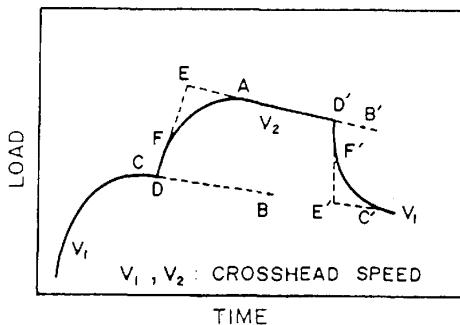


FIGURE 1 LOAD - TIME CURVE

TABLE I METHODS FOR DETERMINING m

M 1	$m_1 = \log(P_A/P_B) / \log(V_2/V_1)$
M 2	$m_2 = \log(\sigma_A/\sigma_C) / \log(\dot{\epsilon}_A/\dot{\epsilon}_C)$
M 3	$m_3 = \log(\sigma_E/\sigma_D) / \log(\dot{\epsilon}_E/\dot{\epsilon}_D)$
M 4	$m_4 = \log(P_F/P_D) / \log(V_2/V_1)$
M 5	$m_5 : A. Arieli et al. (1976)$
REL	$m_R = d[\ln(\sigma_0/\sigma)] / d[\ln(-\sigma_0/\dot{\sigma})]$

TABLE II MEASUREMENT OF m (973 K)

V1-V2	M1	M2	M3	AVE	M4	REL	M5
0.1-0.2	0.503	0.517	0.482	0.501	0.219	0.040	0.41
0.2-0.5	0.442	0.462	0.454	0.453	0.228	0.055	
0.5-1.0	0.409	0.453	0.447	0.436	0.220	0.126	
1.0-2.0	0.431	0.487	0.446	0.455	0.254	0.172	
2.0-3.0	0.418	0.517	0.425	0.453	0.217	0.173	
2.0-5.0	0.417	0.476	0.439	0.444	0.263	0.173	
AVE	0.437	0.485	0.449	0.457	0.229	0.123	